column
第8回

NBAは何がすごい?!

【Dr.辻のバスケ考】
スポーツ選手は社会や子どもたちの規範

2007 NBAプレーオフファイナルのキャバリアーズVSピストンズ戦（2007年6月3日）で、チームメイトに大声で指示を出すレブロン（キャバリアーズ）

単なる憧れを超えたロールモデルの出現に期待

NBAがいよいよファイナル突入です。長いシーズン闘ってきていよいよチャンピオンが決定するわけです。世界中の注目を浴びて、レギュラーシーズンはもちろん、プレイオフになってもこれだけ多くの方々に元気、感動、仲間、成長を与え続けられるすごさとは何なのでしょうか？考えてみたいと思います。

まずは選手一人ひとりの美しいプレイ、バスケットボールを実際にやる人もそうでない人もプレイの美しさに心引かれ感動するのではないでしょうか？プレイにもいろいろあります。ダンク、アシスト、3ポイント、チームプレイ、ドリブル、ブサービターなどなど、数えきれません。美しさに感動するという人間の琴線に触れるプレイの存在が、魅力の第一に挙げられると思います。

そして、素晴らしい憧れの選手たちの存在です。ロールモデルという概念がアメリカには強く存在し、スポーツ選手こそ社会や子どもたちの模範になるということが社会文化としてあります。そのため、単なる憧れを超えて、超人的な近づけないほどの存在でもあり、かつ、自分たちもああいうふうになりたい、真似して生きたいと思わせる近い存在でもあるのです。

マイケル・ジョーダンしかり、マジック・ジョンソン、ラリー・バードみなそんな存在だったのでしょう。今年で言えば、レブロン・ジェームスやティム・ダンカン、ジノビリ選手たちでしょうか？個人のこういったロールモデルになる選手たちの存在が元気や成長を多くの人たちの日々の生活にもたらされて、NBAそのものが魅力的存在となっていくのではないでしょうか？ロールモデルの出現が一つの鍵でもあるのかもしれません。

NBAは地元の生活になくてはならない存在

そして、仲間意識です。日本のプロスポーツもようやく地元密着の形態になりつつありますが、NBAのすべてのチームは地元あっての活動です。スパーズのサンアントニオやキャバリアーズのクリーブランドもみな地元のファンたちが自分たちの誇りを掛けて年間を通して応援しているわけです。全米の主要都市にNBAのマイチームが存在し、自分のことのように勝敗に一喜一憂したり、解説者となったり、知らない人同士がスポーツバーで友達になったりして、その地元の生活になくてはならない存在になっているのです。

こうしたファンは勝つことを願ってはいますが、必ずしも強いチームだからファンだというわけではありません。仲間意識がスポーツによって芽生えるような社会的存在にバスケのチームがなっているということなのです。ファンとの交流もあるでしょうし、チームや選手がバスケだけするのではなくファンの存在を常に意識して生活しているのです。それまでもがプロバスケ選手としての仕事であるように……。

元気、感動、仲間、成長を多くの人たちに与え続けてくれるNBAはわたしたちバスケファンはもちろん、世界中のスポーツファンの心に夢と笑顔を提供してくれるありがたい存在に他なりません。

辻 秀一
（つじしゅういち）
スポーツドクター

1961年東京都生まれ。北海道大学医学部卒業。慶應義塾大学で内科研修を積んだ後、スポーツ医学とスポーツ心理学を専門とする。現在エミネクロス代表としてさまざまな人のQOL向上をテーマに、集団や個別に対しチームドクターとしてカウンセリングやメンタルトレーニングでサポートしている（www.eminecross.com、03-5474-3755）。子どもたちの人間学育を目的としたスポーツ塾"チームエミネクロス"や車椅子バスケットボールチーム"No Excuse"、障の不自由な人たちのバスケ"Rough"、元急性白血病を克服するトップバスケチーム"Excellence"、誰でもが参加できるストリートバスケ"エミネクラブ"などを運営するNPO法人エミネクロス・スポーツワールドの代表でもある。またビジネス界、芸能界にスポーツ心理学を「はメソッド」として導入しビジネスマンや芸能家もサポートしている。

主な著書に「スラムダンク勝利学」（集英社インターナショナル）、「人のためになる人、ならない人」（パジリコ社）、「弱さを強さに変えるセルフコーチング」（講談社α新書）、「心のカコーチング」（講談社）、「ほんとうの社会力」（日経BP社）、「演奏家のためのこころのレッスン」（音楽の友社）など著書多数。